上下左右⇔入れ替り

音無　無音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
上下左右⇔入れ替り

【Ｎコード】
Ｎ３１５３Ｖ

【作者名】
音無　無音

【あらすじ】
ある、男女の双子がいた。　その双子の片割れの姉は男勝りで綺麗な顔持ちの少女。その双子の片割れの弟は“男の娘”の部類の少年。　そんな双子はある日弟が部屋を出た際、姉と衝突し、キスをしてしまい――。　しかしそれだけでは済まず、って、「「体が変わってるー！？」」き、近親相姦ってわけじゃ無いんだからね！
■いちおー、ガールズラブ、ボーイズラブ入れときます。いちおー。

1　前方チュー意！

「んむむむ」
自室で悶々と宿題に取り組む彼女、あ、いや、彼。
彼は岡林（おかばやし）らいと。　れっきとした男・・・・・・なのだ。
「ふわ、わかんない！らいなちゃんに聞きに行こう」
らいな、とは双子の姉、岡林らいな。
彼とは正反対で、綺麗な顔立ちだが、男勝り。
彼は女子より男子にモテるが、彼女はその逆で男子より女子にモテる。
ある意味似た者同士なのかもしれない。

カチャリとドアを開け、隣にある姉の部屋に向かおうとしたとき――
「あ、え、らい――」

不意に唇が触れ合う感じがした。

「「んにゃ！！」」

●○●○●○●○●○●○●○●○●

「ふぐう・・・・・」
（ってあれ？目の前に僕が倒れてる・・・・・）
よく見ると着ている服が違う。　先程までらいなが着ていた。
ぺたぺたと顔を触って確かめる。
「ふあ、ふあああ！？」
胸についていけないものがついていて、ついてなければならないものがない。
確認し、触ろうと――

「ちょっと、双子でも許さないよ！！」

という言葉で我に帰る。

口調がらいなだ。

「らい、な、ちゃん？」

「ったた・・・・って、えええ！？」

注意しといて、今更気づくらいな。

「ど、どーいうこと！？」

「わ、わかんない・・・・・、も、もしかするとー」

「「キスした途端に精神が入れ替わった、とか」」

「「・・・・・・ないよねー」」

・・・・・・・・・・・・。二人は一時停止して、お互いでお互いの頬をつねる。

「「いひゃい」」

パッ、と離すと今度はひとつの部屋に集まった。

そして顔を見合わせ――

「「どうしよう！？」」

1　前方チュー意！（後書き）

きました、作者は病気シリーズ
俺一応中二病って言うのにかかってるからさー↑

2　報告は決まってます

「ふわえええん、らいなちゃぁぁぁんどーしよおお」
「な、泣くな！お前男だろー？んー、あ、そうだ！もう一回キスしたら直るかも！」
「えぇー、自分とキスって気が進まないよ」
「それはこっちも願い下げだよ。でもこんな体で一生なんてやだしねー」
「も、もしかしたら夢かもよ？」
「だったら、なんで痛かったの」
ぶにー、とらいなはらいとの頬を引っ張る。
「ふああ、いひゃいいひゃああい」
涙目になって悶えるらいと。　じたばたと両手両足を動かしている。
「さ、試してみればわかるでしょ。これで直らないなら・・・・・」
とらいなが口ごもる。
「・・・・・うん」
「ねー？らいなちゃーん？」
「んにゃっ！？」
いきなりらいとの可愛らしい顔が近くにあるんだから、誰でも驚くだろう。
「チューー、するんだよね？」
「ふぐぐぐ・・・・・」

●○●○●○●○●○●○●○●○●

結果。　戻らなかった。
「嫌だよお、これじゃあ男の娘じゃあすまないよお」
ふええん、と泣くらいと。　まるで女の子だ。
「お、お母さんに相談してみましょ！」

「んぬう・・・・・・」
気が進まないようだ。
二人は重い足を階下へと向けた。

そして母親の反応は――
「あなた、らいなじゃないわね！？あなたもらいとじゃない・・・・・・」
「「わかるの！？」」
「勿論よ？だって」
と言い始める。
「らいなが内股なんてしないし」
「うっ」
「らいとがそんな男らしくないもの」
「うぇうっ」
ズバズバ言う母親だった。

●○●○●○●○●○●○●○●○●

「なるほど、理解できたわ。」
母はソファに腰掛け、腕を組みつつそう言った。
「お父さんが帰ったら言いましょ」
「「うん」」

●○●○●○●○●○●○●○●○●

「なるほど」
父親も母親と同じ反応を示した。

「それなら、お父さんの知り合いにもそ――んむぐっ！？」
「どうしたの？・・・私も友達に――ふぐっ」
「「？」」
そこでらいながはっとする。
「まさか、教えていいのには人数が限られてるとか！？」
となると二人までである。

3　目の前は敵のみ

「ふ、うぅぅぅ」
泣きながら夏の制服を着ている彼女、基、中身は彼。
「嫌だなあ、女の子みたい、ってもてはやされた事はあったけど」
姿見を使って自分の今の姿を見る。
「女装はなかったもんなあ」
まじまじと見る姉の体。
「・・・・・ら、らいなちゃん意外と胸ある・・・・・って、僕！
しっかり・・・・」
と考えているうちに不意に部屋をノックされる。
「んにゃあ！！」
「・・・・・らいと？入るよ」
声の主は、らいなだった。

「い、いい？今日学校行くにあたって注意があります」
「ふぁ、はい」
「自分で言ってて泣きたいけど、友達は少ない方だから安心して」
「・・・うん」
「だけどね、だけど」
「？」
そこでらいなは言葉を詰まらせる。　そして俯き、
「・・・・・・・あっちの方から話しかけてくるから。基本、無視
してて」
「？　うん」
あ、とらいとも何か言いたげだ。
「僕も、そんな感じだから」
「・・・・・・・・」

「「前途多難だね」」

4　学校は危険区域

「らいとく～～～ん？」
気持ち悪いぐらい甘い声を出してらいと（ＩＮらいな）に近づく男子。
「も～～、無視しないでよ」
「・・・・・・・」
らいとの言葉を思い出す。

『何度か僕も反撃したことあるから、マジギレしたら殴ったりしていいよ』
『で、でもそしたらいとの体が傷つくじゃない』
『大丈夫！一応これでも男子だから多少は鍛えてある』
まあらいなちゃん程強くないけどね、と笑った。
らいなは異常なのだ。　空手や柔道、剣道、テコンドー、サバット、格闘技など戦闘で使えそうなものは一通り習い済み。
更にはその大会などでは必ず爪痕を残して帰るのだ。

「ねえ？」
「！」
ぼーっとしている間に囲まれた。
「遊ぼうよ」
「生憎僕も暇じゃないの」
ツン、と返す。
「ふぅん」

●○●○●○●○●○●○●○●○●

「いやぁぁぁぁぁぁ、こないでええっ！」
その頃のらいとはというと・・・・・・。
女子に追いかけ回されていたのだ。
（お母さんいわく、記憶喪失で通ってたんじゃないのー？）
女子の会話を盗み聞くと――

「今のうちに私たちへの愛を埋め込めばいいのよ！」
「そうね！！」

「ふわえええええっ！！」
角を曲がった瞬間――
ドン、と誰かにぶつかる。
「ん、ごめんな――ってらいなちゃん？」
「立てる？走って！」
「ふえ、あ、うん！」
らいなはらいとの手を引いて走った。　その後、女子は追って来なかったのだ。

「らいなちゃんも大変なんだね」
「うん、結構アタックしてきてさ」
「それにしてもスパッツはいてるからってスカート大変だね」
「でしょ？まあお陰で私はズボンなんだけど」
「ぬう、いいなあ」
じぃ、と足を見つめるらいと。
「待って」
「！」
いきなり自分の顔が近づき、驚くらいと。
「ふぁ、な、なに？」

「虫、肩についてた」
「あ、ありがと・・・・・・」
（わ、わ！相手はおねーちゃんだよ！）
ブンブンと顔を左右に振るらいとだった。

5　姉弟喧嘩

一難去って帰宅しているらいと。　一日大人しくしていたせいか、女子らからの印象が変わった。
むしろ襲われやすくなった気がしたらいと。
「らいなちゃんはどっかいっちゃうし・・・・・・」
はあ、と大きくため息をついた。
足元がスースーする。　スパッツを履いているがそればかり気になるらいと。
「・・・・・・はぁ」
それも兼ねてもう一度大きく息を吐いた。

「おかえり～～～～～！ら～いっとくん！」
母親がむかつくテンションで話しかける。
が、らいとは無視。
「あらら？いつもなら「うん！ただいまあ！！」なのに」
「疲れてるのよ」
後ろかららいとの声・・・・・だが中身はらいな。
「らいなちゃん。おかえり」
「うん」
やはり、中身はらいなの為返事は冷静なものだった。

「ちょっと、そろそろ慣れてよ」
「で、でもお」
「ちょ、私の顔でそんな顔しないでよ気持ち悪っ」
ばしんと頬を叩く。
「・・・・・・・・」

「何よ」
「痛くない」
そして泣きそうになる。
「弱いのよあんたが。――あ、私の体で殴らないでね。絶対痛い」
「本当は僕達、こういうので生まれるはずだったのかもね」
「？　どーいう意味？」
「女々しい男、男勝りな女・・・・・。あーあ、僕もらいなちゃんみたく強ければなあ」
「じゃあ鍛えなさいよ」
そう、落胆する。　らいなだって疲れているのだ。
「もうあんたの愚痴ばっかり嫌だわ。　部屋に篭る」
「えぇー！勉強教えてよ」
「今日はなし！！！」
そう言って、怒りに任せドアを強く閉めた。
廊下には虚しく突っ立つらいとだけ残されたのだ。

5　姉弟喧嘩（後書き）

どうしましょう・・・・

次話のストック書いてたら、長引きそうな予感がします・・・・

6　姉弟喧嘩？

――・・・・・・・
「・・・・・・」
静かな部屋にらいながこもる。　時々聞こえる溜息は本当に重いものだった。
（あーあ、私ってやっぱりダメだな・・・・・。）
そう頭を抱え込む。　そしてまた溜息一つ。
力任せに怒っては反省の溜息。　それが最近繰り返していた。　原因は、弟の彼だった。

数日前。　そう、彼らがまだ変わらなかった頃の話。
「ちょ、どーしたの？」
らいとはその日前後から帰りも遅く、ボロボロになって帰ってくる。
　中々事情さえ話してもくれない。　本当に心底心配になったらいなは、単独で彼の友人に、聞きに行ったのだ。
入ってきた情報はとんでもないものだった。
最近、彼のことを気に入った男子の中で大将（ボス）的な存在の男が、らいとを捕まえようと暴力任せに走り回っていたのだ。　勿論部下たちも。
それを聞いたらいなは怒りに震え、一人でぶちのめしに向かった。

結果。
圧勝だったのだが。　スポーツで鍛えたただの筋肉と、格闘技全般を鍛えたらいなとでは差がありすぎたのだ。
らいなは、彼女を守る彼氏のように毎日毎日彼を影でひっそりと守り続けていた。
――だがそれも。
体が変わり、ストレスも溜り。　どうにもしようが出来なくなった

のだ。

「・・・・・・私に、どうしろって言うの・・・・」

そうこうしているうちに階下から母親の声。　夕飯時だ。

（・・・・・・・・・・・・要らないなあ）

「ら、らいなちゃーん・・・・・ご飯だよ？」

廊下かららいなの部屋へとか細い声が通る。

「・・・・・・・・要らない」

「そ、そっか！夕飯前に何か食べたの？お、お腹すい――」

「煩いよ。　もう・・・・放っといてよ」

「・・・・・・・・・・！　そ、そー・・・だよね、煩いよね」

声が変わるのが分かった。　か細かった声が震え怯えている。

らいなは下唇を噛み、悔しそうに声も何も出さず泣いた。

7　クラスメイトと朝

『ギャハハハ！お前、女に守られてやんの！』
それまで僕は思ってなかった。　守られてるなんて。　やっとらいなちゃんに守られてるって知ってちょっぴり情けないって思っちゃったんだ。
それでもうひとつ思ったんだ。　僕――

「らいなちゃんを守らないとって・・・・・・・」
彼もまた、自室で考えていた。
（守る？・・・・実際足引っ張ってばっかじゃん・・・・・）
守る為、基礎体力としてバスケ部に入った。　――まあ一応レギュラーだけど。
「無力・・・・・」
嘆くように呟いた。
ふと時計を見る。　十一時。
「・・・・・・寝よ」

翌朝――
「あら、らいなちゃんおはよう」
「・・・・・・・・・・・うん」
「元気ないわねえ？今日は土曜日よ？早起き過ぎないかしら」
「いいの。ちょっと散歩行ってくるね」
「らいとくんの体よー」
彼女にはその注意がなんだか分かった。　でも基礎的な筋力はある。
いざとなれば使えるのだ。

「お、らいとじゃん？朝早くねー？」
クラスの知り合いだ。　一応らいととはクラスメイトなのでらいなは顔ぐらいはわかる。
基本話さないけど。
「うん。おはよ」
「何かクールだな。お前の姉貴っ！って感じ」
「そう？」
（私あんたと話したことないけど・・・・？）
しばらく歩くとコンビニを発見。　彼はそこに用があったらしい。
らいなも暇だったので一緒に足を運んだ。

「なあ、ねーちゃん元気？最近顔出さないしさ・・・・」
らいなは首を傾げた。　話もしたことない相手に気を遣ってもらう必要はない。　以前に奴は学校サボっていたのかと怒りを覚えた。
皆勤賞を逃したためだ。
「一応元気だよ？　病気とかないしね。　まあでもメンタル面でちょっとあれなんじゃないかなぁ～？」
極限に弟の真似をするらいな。　心底気持ち悪いと思っていた彼女。
「・・・・・・そか」
（なにこの雰囲気・・・・・・）
「心配だったらみにくる？」
「えっ、えええ？！え・・・・そ、その・・・・えと・・・・い、いやっだ、だいじょう・・・ぶ」
真っ赤になりテンパる。
ボソボソ何か言ってたけど、聞き取れなかったらいな。

「じゃあ僕ここで！朝ごはんまだだったんだ～～、じゃあね！桐舟くん」
「おう」
彼女たちはそこで自宅に向かうため別れた。

7　クラスメイトと朝（後書き）

意味ありげに終わりましたが
次回で終わりです

8　最終話でも前方チュー意！？

「もうだめだ！！！」
がたんと椅子から立ち上がる。
「謝りに行こう！！！」
そういって部屋を飛び出し姉の部屋に向かおうと――
（あれ？これ――）

そしてまた唇に記憶にある感触。

「「んにゃっ！！」」

●○●○●○●○●○●○●○●

「らいと！らいと！」
「ん”・・・・・うう・・・・・あ、らいなちゃ・・・・・・って
あれ？」
目の前にあったのはついさっきまで自分の体だったらいなの体。
「戻った！戻ったの！」
きゃーと両頬を抑え悶えるらいな。　感動でテンションもマックスだ。
「あ、あのね！らいなちゃん！」
「怒ってないわよ。私こそごめんね」
「あれ？なんでわかったの？」
「隣の部屋からあんな大声聞こえたんだもん分かるよ」
「・・・・・・・ごめんね」
らいなはただ微笑むだけだった。
「だけど、どうしよう。戻っちゃったし・・・・・・、一件落着？」
「だね・・・・・僕思ったんだけど」

「「自分の体が一番だよ」」

重なる声を確認してふたりは目を見合わせにぃと笑った。

「たっだいまー！んー？これはホットケーキの匂い！？」

「おかえり～～～～！らいとくぅぅぅん」

「お母さんっ」

いつもの騒がしい日常。

「ただいま」

「おかえり。らいな」

昨日までのことが嘘だったのかのように両親の記憶からは抹消されていた。

そして二人。　あのあと、どうしたのかさえ覚えていない。

（夢だったのかなあ）

そう振り返る。　だけどふたりは思った。

唇に残った、触れ合う感じは忘れない、と。

8　最終話でも前方チュー意！？（後書き）

兄弟愛みてえになりやがった畜生。
新連載のため半強制終了っぽいですが・・・・・・・
ありがとうございました！

次回の次回作にガールズラブ考えてます

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3153v/

上下左右⇔入れ替り

2011年10月3日11時12分発行